

## 「僧医」という仕事

沖 陽輔  
(高37回)

人生は「苦を生きる」もの。だからこそ喜びや、幸せを求めるのです。苦を生きている中に、わずかな光明を見いだしていくのです。仏教の基本的な考え方です。

### 卓球班での日々が原動力

私は、飯田高校では卓球班で、3年間休みなし、勉強そっちのけ、の時間を過ごしました。そんななかで進路相談になり、宇宙の研究をしたくて担任の「原幹先生」に相談したところ、「おまえの成績ではどこも行けんぞ」と言われ一浪。その間に色々考え、医者になりたい、絶対なるんだという思いになりました。

浪人した1年間は卓球班でのエネルギーをそのまま勉強に注入し国立山梨医科大学に入学。6年間の勉学の後、医師国家試験にも合格しました。これも、卓球班で毎日走り込んでいた飯沼神社の252段の石段トレーニング



のおかげだと今も思っています。

医師になり、まずは国立東京医療センターで初期研修を受けました。睡眠時間も殆どない2年間のなかで癌治療の道に進もうと決意し、最先端の癌治療の診療に励みました。当時は緩和ケアなどという言葉もありませんでした。私は、癌の症状で苦しんでいる方、心が折れそうになつていての方たちのケアに進もうと思いました。

その後、日の出町の日の出ヶ丘病院がホスピスを造る、医師を探しているという話を聞き手を挙げました。

ホスピス医に求められるのは、まず癌患者さんの身体的苦痛症状の緩和です。当時は日本語の教科書もなく、洋書を見ながら模索を重ねる日々でしたが、次第に苦痛緩和の手法にも精通し、多くの患者さんが日の出ヶ丘病院ホスピスを希望し来院されるようになりました。

●おき・ようすけ

僧医。鼎生まれ。山梨医科大学卒業。平成4年、医師国家試験合格。初期研修後、がん診療に取り組み、令和4年3月から上相原病院副院長。(公益)東京都山岳連盟顧問。クターも務める。今なお、海外の登山や山岳スキーを企てている。

## 仏教を学び「僧医」へ

診療を続ける中で、身体症状以外の相談が多くなってきました。それは患者さんからの「今を生きる意味がないのですよ」というものでした。私は当初、うつ症状かな、考えすぎでは、などと思つていました。しかし、緩和ケアの洋書を開いてみると、一項目に、「Spiritual Pain」という項目があり、ケアの非常に難しい症状で医学だけでは解決できない、と書いてありました。Spiritual Painとは「生命の危機的状況に陥つたとき、生命予後がわずかとなり、自分の生きている価値が見いだせず、自分の生きる意義が見いだせない状態」とあり、腑に落ちました。しかし、それをどうケアしていくのかに関してはどの教科書にも具体的な記載はありませんでした。

人の最期を楽にするのは、モルヒネと般若心経（仏教）だと思い、2008年に得度し、私は僧医となりました。今は、町田市の上相原病院で僧医として診療しています。最期まで過ごせる上相原病院で、苦を抱えながら懸命に生きている患者さんが、少しでも光明を見いだせるよう診療にあたっています。

師である山崎章郎先生に相談したところ、「実はそれが難題なのだよね。欧米では宗教。現状では、患者さんの話をとにかく訊くことだね」とのアドバイスをもらい、まずは実行してきました。

この頃、横浜の弘明寺で、癌を患つた方を集めて定期的にお茶会をしているとの話を聞き、参加させて頂くようになりました。何回か参加するなかで、仏教が

た。そこで、ブッダの教えをホスピスでも実践していくことを、仏教の勉強を始めました。

患者さんと、率直に死に関じての話をし、後悔や嬉しかったことなど人生に関しての話を聞き、自分からは仏教の話をするようにしました。すると患者さんのなかに、自分が生きていること自体に意義があるという自信のようなものが生まれ、いい最期の時間を過ごす方が多くなりました。

私にも悩みや、苦はありますが、好きな登山や山岳スキーをして人生を謳歌しています。仏教に出会い生きていくのが樂になりました。人生の当面の目標は58歳でキリマンジャロ登頂、60歳でデナリ（マッキンリー）登頂と山頂からのスキー滑降です。

それから！ 上相原病院にお寺を造ろうかと企んでいます。